

アトリエ・ビスクドール

正会員 前田圭介君

ユニークな現代の屋敷である。戸建て住宅についての通常作法を逸脱した構成の建築だともいえる。浮かぶ白いフェンス、隅々の敷地を余すところなく巡らしたサーキュレーション、自然光と周辺景色を取り入れるガラスの大開口、白いモダニズムのボキャブラリーを用いつつ複合要素で構成されて立ち起こる緩やかな場、作り込まれた各部の非標準的ディテール、敷地勾配と段差を利用した平屋のゾーニングと空間構成、実現を支えた構造設計と施工技術の力。そのひとつひとつは、大阪郊外の穏やかな住宅地との対比が一見強く眼に映るが、一方、限られた敷地に長大な経路を巡らせて外部環境に敏感に応答する多数の室内をまとめあげる計画力と設計力は極めて高度巧妙である。人形作家のアトリエ併用住宅という計画条件のもとに、建築（上屋）と敷地（敷）の関係を丁寧に読み込み敷地に組み込み編み込み作り込むその作法は、現代の屋敷ともいいうる新しい建築型の可能性を示唆している。設計者の説明によれば、コートハウスからスタディを始めたものの、閉じて完結する建築形式が周辺との関係においてしっくりこなかったため、ある時点で内外を反転させる形式を持ち込み、この実現案が生まれたという。写真ではラディカルな前衛的外観が強調されて伝わるが、実際のところ、浮かぶ白いフェンスを携えるこの住宅建築は、不思議なくらい住宅地にフィットしている。前面の道と地続きの前庭が敷地内外を緩やかに隔てつつ繋ぎ自然な住宅地の景観をつくりだしているからである。北側の道路からフェンス内に入ると円弧を描くスロープで、作品展示のショーウィンドウを眺めながら人形作家の工房へとアプローチする。アトリエは、周囲の住宅地の景色を臨む開放的なワークスペースであり住宅内外の緩衝空間として創出されている。なかを割る通路を西側に突き当たり、パーキングから直接住居に出入りできる位置に住居用エントランスが設けられていて、小高い住居レベルの南側は敷地ぎりぎりに作られた外壁が隣地との境界を構成する。全面トップライトの採光の下に室内に取り込まれた通路に沿って線形の庭が、ワンルームのプランニングの住居部分へと導くように構成され、アトリエとは段差を利用した視線の高さの変化および大型の明障子によって仕切られている。

ずらして重ねた 3 つの四角形リングによる領域設定を建築化するという全体構成のアイデアが即物的に鋼構造に置き換えられたため、経年変化を考慮すると細部において維持管理に注意を払う点があるように思われるが、それは設計者が建築主とともに今後長期に渡って相談しつつ解決していくことであると判断した。以上、環境計画空間構成のユニークさとバランス、地域環境への適合性、内外空間の造形性、そして現代の屋敷といえる住宅建築設計方法のオリジナリティなどの点で、きわめて優れた建築であると審査委員会で認められた。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。